

博士論文（要約）

園における3歳児積み木場面の検討

宮田 まり子

本研究は、園に設置された積み木に対する 3 歳児の行為、及びその積み木を介して行なわれる他児との相互行為についての過程を検討することを目的とする。幼児教育は環境を設定することから始まるが、法制上に具体的で詳細な物の設置や配置義務はない。現状では幼稚園が培ってきた文化と各園の歴史を引き継ぎ、各園の保育者たちが幼稚園教育要領等に則って作成する保育計画に沿って判断し設置している。積み木は、保育教材としての歴史が最も古く、普及率も高い。しかし積み木を含め、日本の幼児教育分野における積み木に関する教材研究は未だ少なく、幼稚園設立(1840 年)より乳幼児の保育に必要な物として設置されてきたにもかかわらず、その価値や意義を究明した知見は殆どない。そのため、積み木などの教材によって構成配置される物的環境がいかんして幼児間の関係をつなぎ、発達を支援しうるかについては明らかにされておらず、効果的かつ実践的な支援方法についても提案されていない。そこで本論文では、積み木の教材としての歴史的検討から文化的意味を究明した上で、園における 3 歳児が、積み木を介して他児と相互行為を行なう実際の様子から、積み木という教材が 3 歳児の相互行為に及ぼす影響について検討する。本論文は全 3 部 8 章からなる。

第 I 部『問題と目的』ではまず、本論文が分析の対象とする積み木が幼稚園に設置されるまでの経過を概観し、積み木を用いた幼児教育方法と評価を検討した(第 1 章)。今日の積み木はフレーベル(1782－1852)が制作した恩物に起源があるとされる(是澤, 2009)が、今日の積み木はフレーベルの方法や評価とは異なる。幼稚園開設の初期の日本に普及していた恩物の、形式主義的な側面を批判する倉橋ら(1966)、その他保育者らによって、フレーベルが意図した順番が取り除かれ、幼児の遊びの道具や手段として設置された経緯がある。これら保育内容の変遷は、幼児の環境選択の主体性を保障したが、一方でフレーベルがこだわった形体と刺激との関係について検討する機会を無くしている。今日、フレーベルの教材や保育方法を支持し実践する施設は、少数にとどまっている。積み木は、保育者主導による形式主義的保育の象徴的な教材として認識された過去から、幼児の意思を尊重する自由保育導入にあたって設置方法が注目されるという経過をたどった。多くの園では、幼児に積み木の場合や一つひとつの積み木の選択を可能にしておき、幼児の主体性を重んじる保育者の保育方針を表す象徴的な空間の一つとして存在している。

第 2 章では、研究の方法と分析の視点を得ることを目的とし、積み木に関する先行研究の知見と課題を概括した。積み木に関する先行研究から、教材としての積み木の特性について①積み木の形状②数の 2 点が、また積み木を介しての特徴的な行為として①個体の操作②操作に伴う積み木の崩れ等構造物の変化③授受④意味付けの 4 点が変化要因として分析の対象になり得る可能性が推察された。また 3 歳児クラスにおける保育方法に関する先行研究では、遊ぶ幼児に関わる保育者の援助として、①言語的援助②身体接触③視線の共有④身体的な同調が想定される知見を得たが、これらは必ずしも積み木場面固有の援助であるとはいえず、上記積み木場面固有に見られる場の変化と行為に着目した詳細な分析が必要であると考えられた。また園の中での相互行為に関する先行研究からは、園の中での相互行為に関わる要因が、個の発達のみにあるのではなく、クラス集団の中での見え(他者評価)が相互行為の機会の獲得に影響する等、多様な要因が関係した結果である可能性が示された。そのためこれら先行研究に示された要因に着目することに加え、3 歳児積み木場面という全体的な観察の他、更に場面を特定して焦点的な観察も行なう等、可能な限り微視的な分析を行なうこととした。以上より、自由保育中心の保育を行なう幼稚園に研究協力を依頼し、登園から昼食、または降園までの間で自ら積み木場面に関わる 3 歳児に対する参与観察を行なった。観察は入園後約 1 週間から始めた。最初は保育者の補助をするなどして保育に

参加して、外部者の観察が生起する場の緊張を軽減するよう努めた。幼児の生活が安定し始めて積み木場面が観察されてからは、幼児とは距離を置いて観察した。観察後、メモとビデオカメラを基に記録を作成した。第一段階の観察を2011年4月から学年の終わりまでの間(内68日間)で行ない、3歳児クラス積み木場面の1年の過程を第5章で明らかにし、その後年間の変化の要因として特定された積み木の構築の変化に着目した観察を、2012年9月から11月までの観察(24日間)にて行ない、特定の場面における行為を第6章において分析することにした。第7章ではそれらの期間の積み木場面での保育者の参加と支援と幼児の相互行為との関係を検討した。

上記本論文の目的に対し、第Ⅱ部『3歳児積み木場面の実証研究』において、①積み木という教材を紹介した幼稚園3歳児の他児との相互行為についての3歳児クラス積み木場面の1年の過程(第5章/研究1)②積み木固有の変化場面における構築物の変化と行為との関係(第6章/研究2)③人的環境としての保育者の3歳児積み木場面への参加と幼児の相互行為との関係(第7章/研究3)の3点の研究を行なって検討した。

第5章では、3歳児積み木場面の1年間の変容過程について、入園一週間後からの参与観察において得られた事例を基に、積み木への行為と発話、積み木の構築物の変化に着目し分析を行なった結果と考察について述べている。3歳児の積み木場面の一年では、①積む目的の出現と相違の時期(6～7月)②積み上がった構築物に対するイメージの表出と共有化へ向かう時期(9～2月)③積み上げに対する役割についての言及がある等の協働の時期(3月)という3つの時期に区分されることが明らかになった。また、これらの時期の変化は、積み木の構築物の「崩れ」が関係している可能性が示唆された。積み木の構築物の変化としての「崩れ」が、積み手の積み木に対するイメージを言語化させ、積み上げの目的達成のための他者への働きかけを認識させることにより、積み木を使う者同士の相互行為を促進させている可能性がみられた。

よって第6章では、幼稚園3歳児積み木場面において、積み上げた積み木が崩れるという構造の変化が行為者に及ぼす影響について、行為の変化の要因となった積み木の「崩れ」に着目し、(1)どのような場面において肯定的な応答が生起するのか(2)崩れという物的な環境の変化が3歳児の積み木場面にいかなる影響を及ぼすのかの2点についての検討を行なった。結果、肯定的な応答が生起するのは積み手に積み上げに対する目的が無い場合であり、積み木に関わる複数の積み手の目的が他者との場の共有にある場合、崩れに対する他者の応答と同調するなど、他者の行為の影響を受けることが示唆された。また、崩しによって明らかになった目的の異なりによって、他者への働きかけを意味する行為が確認された。これらは3歳児がクラスの中で自ら他児と応答的コミュニケーションを介して関係を形成するという能動的な姿勢があることを示す。特に研究協力園では、幼児だけで展開していく場面は多く見られる。この結果は、幼児による主体的な体験を尊重するという研究協力園の教育課程等と関係している可能性がある。特に先行研究では3歳児クラスでは、他学年に比べて保育者が参加して場が展開されることも多いとの知見が提出されている。

そこで第7章では、幼稚園3歳児の積み木場面における保育者の関わりを検討した。人的環境としての保育者は3歳児積み木場面にどのように参加し、幼児の相互行為と関係しているか、また保育者は積み木の場をどのように展開させていくのかについて検討を行なった。結果、保育者参加の積み木の場面では、保育者の発話と行為によって①幼児のイメージを膨らませて展開させていく場合②複雑な構築を目指して展開される場合の2つの展開が確認された。①については、保育者は幼児の発話を再生するな

どして承認し、幼児の行為と同調して幼児のイメージを促進したり指示したりして展開を支援していた。②については、言語によるイメージの伝達のみでなく、積み上げを期待する箇所に適当な形体の積み木を指示するなどの具体性と、積み上げ後への構築物に対する意味付けの有無がその後の場の継続や展開にとって必要である可能性が示唆された。

第Ⅲ部『総合考察』では、これまでの知見をまとめ、園における3歳児の積み木場面での意義を提示すると共に今後の課題を検討した。研究にあたってはまず、そこに積み木が設置されるに至った背景を探ったが、今日多くの園においては、幼児自らが積み木を選択し、自由にそれを構築させていくことが保障されていた。それは積み木という教材提示自体が、幼児への一方的な教授伝達を意図するのではなく、幼児の積み木に対する行為と、積み木が幼児の行為に応じ得る事(積み木の特性)との関係の中で、積み木固有の場を生成させていくことの体験に価値を見出していることが明らかになった。そこで本論文では、そのような積み木の特性と積み木場面固有の行為に着目しての長期的な観察と微視的な記録において分析を行なった。結果、3歳児が特に積み木の「崩れ」を刺激として他児の意図を理解したり、他児への働きかけを促進させたりしていることが示唆された。また保育者が積み木場面に参加する場面に着目した検討では、構築物に対するイメージの生成を支援する保育が積み木場面の展開と継続に必要であることが明らかになった。このように一定の意義は見出せた研究ではあったものの、積み木の材質、空間などが異なる他園、他学年などとの比較検討、及び保育者の保育方法の時期的な比較検討といった更なる検討に加え、行為者個々の行為に対し、他児やクラス集団との関係性から検討を行なうことは今後の課題である。